



「ほろ苦い『乳熱』の思い出。 分娩後はカルシウムのカクテルを」

ちょっと聞いてよ

JA西日本くみあい飼料株式会社広島営業所 獣医師 中尾 継幸(なかお つぐゆき)氏

朝晩に涼しさを感じ始める時期、少しずつ牛に夏の疲れが現れてきます。特に暑さのピーク時期に乾乳期間を過ぎた経産牛は、その時の飼料摂取量の伸び悩みから、分娩後に低カルシウム血症「乳熱」やそれに続発する代謝病を患い易くなります。

私は毎年この時期、まだ獣医の駆け出しだった若かりし頃の「乳熱」に関するひとつの出来事が思い出されます。学校を卒業後、オホーツク海を臨む小さな酪農の街の診療所に赴任した私は、見習い期間が終了し、いよいよ診療に出ることになりました。しばらく経ったある日、「分娩した経産牛が起立できず苦しんでいる」との往診依頼が来ました。まだ現場経験に乏しい私は、首を投げ出し苦悶を示す牛に焦りつつも、冷静さを装いながら、教科書通りにカルシウム剤を注射しました。しかし牛は起立するどころか、ますます呼吸を乱して唸(うな)り声を上げます。今思えばそれは重度の「産褥性心筋症(注)」だったと考えるのですが、当時この病名は認知



されておらず、私は状況を把握できぬまま、ただ症状の好転を祈るのみでした。しかしその願いも空しく、数時間後に牛は死んでしまいました。一人で診療を任されて初めて目の前で牛が死亡した衝撃と、その時の農家のお母さんの残念で寂しそうな表情は、それから二十年経った今も覚えています。この経験を機に、教科書通りにならない

病態の難しさと共に、疾病予防の重要性をまざまざと思い知りました。ここまで極端な重症例はともかく、軽度で潜在的な低カルシウム血症であっても乳熱は、牛の泌乳開始の出鼻を挫(くじ)くとともに、その後のあらゆる代謝病の元凶となります。そのため乾乳期間における飼養管理が極めて重要であることは言うに及びませんが、その発症を防ぐ最終的な『仕上げ』が分娩後のカルシウム補給です。特に経口給与の場合、血中カルシウム濃度が低下した後では、せつかく

飲ませたカルシウムが腸管から十分に吸収されず効果が薄れるため、分娩後はできるだけ早急な対応が必要です。同時に栄養補給としてのカロリーやビタミンを、分娩で失われた水分補給と胃内容の拡充のため二十リットル程度の温水に混合し「カクテルドレンチ」として給与することで、食欲も早く出現し、第四胃変位の予防にもなります。それらを賄う糖類や味噌をベースとした添加剤が多く市販されていますので、適宜それらを利用し、カルシウム補給を確実に実施することで、乳熱と代謝病を予防し、体力の回復とスムーズな泌乳の立ち上がりの特効薬となるのです。

今回のエピソードは、道北では牧草地を吹く風が早や冷たさを増す八月下旬の事でした。今となってはその牛の記憶とともに、農家さんの顔や牧場風景が懐かしく頭に浮かびます。

(注)「乳牛の産褥性心筋症」：著しい低カルシウム血症とともに流涎・発汗などを示し、高熱を伴うこともあり、脂肪肝との合併症として発現することが多いと言われる。